《六郷文王妖術》　道に西瓜を実らせること

ま夏のある日、文王どこからかの帰り道、歩き疲れて新町にさしかかる。口中の渇きをいやそうと、道端に店を広げている西瓜売りに近づいた。「無一文なのだが、のどが渇いてたまらぬ、一つ西瓜を分けてはくれまいか。」「ただでくれとは、これまたなんとずうずうしい。だめだ、だめだ。」と、これまた冷たい、いやもっともな西瓜売りの返事。

「それなら自分で作って食うまでだ。」文王が自分のついて来た杖を道ばたに立て、呪文を唱えると、杖の根元から芽が出、つるがのび、葉が出、花が咲いた。花がしぼむとみるや、青い実が現れ、なおも呪文をつづければ、大きな西瓜となって文王の足下にゴロリところがり、たちまち道いっぱいに西瓜畑が出現した。

やがて呪文をやめた文王、西瓜を割って息もつかずにむさぼり食べる。通りすがりの里人達も、はじめは気味悪さになかめていたが、そのうち一人が食べだすと、われもわれもとパクついた。ガメツイ西瓜売りまで、ただより安いものはないと、大口を開いてくらいはじめる。

「ああうまかった、さらば……」

と、文王が去り、満腹した里人達も立ち去った日暮れどき、残されたのは西瓜売りの男ただ一人。不思議な出来事に首をかしげながら、自分の店先に戻って驚いた。山のように積んであった西瓜は一つ残らず消えうせて影も形もなかったという。